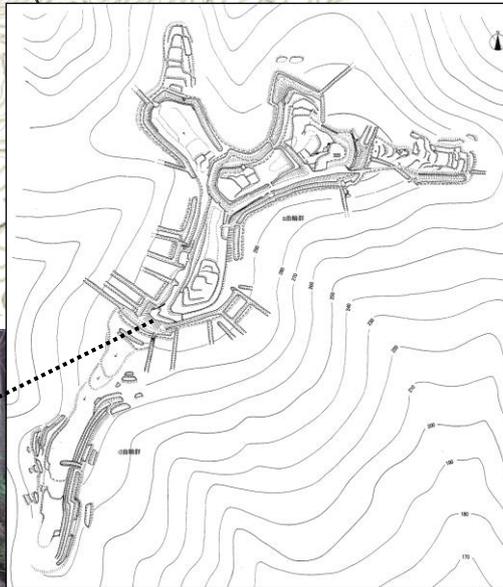


# 佐田(青山)城址

[外部サイトにリンク](#)

安心院町山蔵

(佐田城全体縄張り図)



(a 曲輪群先端の石垣)

cは、aから西側に向かって伸びる尾根の先端部に位置するもので、尾根の堀切から連続して、土橋を持つ横堀に繋がる。主郭は南北7m、東西15mほどの長方形で、北西角部が基壇状に約30~50cm高くなる。主郭周りには切岸により数段の腰曲輪や帯曲輪を作り、一部は横堀状を呈する。南西斜面には土塁を伴う堅堀が一条入れられている。(d・e・f・gは省略)

に位置するもので、尾根の堀切から連続して、土橋を持つ横堀に繋がる。主郭は南北7m、東西15mほどの長方形で、北西角部が基壇状に約30~50cm高くなる。主郭周りには切岸により数段の腰曲輪や帯曲輪を作り、一部は横堀状を呈する。南西斜面には土塁を伴う堅堀が一条入れられている。(d・e・f・gは省略)

**歴史** 文書での初見は、明応7(1498)年に大友親治が「佐田古城」を攻めた時であるが、その際防備側の佐田泰景は「飯田山佐田山所々御陣等」を馳走した。これ以後、佐田城に関する文書は一切なくなる。これだけの規模と明確な意図を持った縄張りの城郭が文書・記録に残らないのは不思議なことである。(中略)…堅堀と組み合う横堀の出現年代は永禄~天正期頃と考えられており、中国の毛利氏や北部九州東部の秋月氏等の城郭に特徴的な縄張りとして極めて類似していることも確かなことである。従って、本城に係る陣立ての主体については、大友氏と島津氏の抗争、さらには黒田氏の豊前入封を契機とする一揆等々の背景を含め、その蓋然性を追求していく必要がある。

(資料:大分県教育委員会~大分の中世城館~第4集総論編)



応永6年(1399)、宇都宮親景が築城。

名を佐田親景と改め、大内氏に従っていましたが、大内氏滅亡後は豊後の大友氏の配下となりました。天正15年(1587)に豊臣秀吉の九州制圧に伴い佐田氏がこの地を追われるまで、佐田氏8代188年間の城地となりました。

**立地** 標高約300mの青山を中心として、そこから派生する尾根や尾根先端のピークに城郭遺構が見られる。麓との比高差は200mである。

佐田城の位置する場所は、豊前の南端に近く、ここからは東へ行くと豊前宇佐との境をなす立石へ、南へ下ると背後に府内を抱えた別府湾の山手に出ることになる。まさに豊前・豊後の国境に位置する交通の要衝ということになる。

**構造** 図のように、aからgの7箇所遺構がある。

aは、比高差約200mの山頂にあり、最高所の主郭を含む約400mの範囲が中心曲輪(くるわ)群である。山頂部は登山道の険しさに比べ比較的広く平坦で、天然の要害となる急峻な山容を利用する城とは違った縄張りである。

最高所の主郭は、大規模な土塁と横堀が巡り、直径55m×短計20~25mほどの曲輪で、北西部のコーナーが地形に合わせて北側に張出して不定形であるが基本的には長方形を呈し、他のコーナーはしっかりと角をとっている。東南辺の土塁中央ほどに開口部があり、平虎口となっている。曲輪群は主郭を中心に南西、北西、東にのびる丘陵に両肩及び片方に土塁をもつ大規模な堀切、横堀、これらに接続する堅堀で固められた曲輪がそれぞれ一つあり、主郭を強固に固めるが、曲輪内方は主郭に比べ平場の形成が弱く、丘陵先端に向かって削平段状の平場を階段状に繋げている。曲輪の外側にも多くの削平段と横のラインを守る横堀や丘陵を遮断する堀切が設けられ、二重三重に固め、堅固な構えである。特に南西の曲輪に横堀と繋がった堅堀群が集中的に認められ、この方面からの攻撃に神経をとがらせ、丘陵尾根を二重の大規模な堀切で遮断し、横堀は随所に高低差のあるクランクや不連続部を設け、堀底には障壁を設け、縦方向の堀を接続させて斜面や横堀内での横の動きを封じている。また守りの重要なポイントとなる南西曲輪の先端部北側や東曲輪の東端、主郭虎口南側に自然石や粗割の石材を垂直に小口積みした石積み(石垣)が築かれている。

bは、中心aから比高差約100mの谷を隔てた東側400mの、ほぼ独立した山の上にある。楕円形状を呈する単郭の曲輪の南半に横堀を巡らせる。横堀は、aとの関係を意識するように西側中央で土橋を持つ。曲輪の削平は十分でなく、周辺は不明瞭な削平段となる。